

学校だより

社会に通用する生徒を育てる。

ある教育学者によると学校を計る物差しは3つあり、その3つを点検すれば学校の教育の現状がわかると述べています。その3つとは、①全校生徒の靴箱のかかところがきちんと揃っているか。②自転車の置き方がきちんと揃っているか。③体育館などで行われる際の、全校生徒が入場退場するときに無言で移動できているかです。さらに良い学校をつくることとして、朝の挨拶をする、靴のかかとを揃えて玄関をきれいにする、誰もが気づいたらゴミを拾うことと述べています。これらは、家庭生活や職場においても同様なことが言えると思います。

本年度、目指す生徒像「当たり前のことか当たり前でできる生徒」に「社会に通用する生徒を育てる」という文言を加えました。義務教育の中で、社会に出て恥じない大人となるために、常識的なモラルやマナーを身に付けさせることは、学校に課せられたひとつの役目だと認識しています。

その中で、生活習慣の基本であり、人間社会のルールとして「時を守り、場を清め、礼を正す」という言葉があります。「時を守る」ということは、相手を大切にすることであり、時を守れる人は、信頼される人となり、チャンスを生かせる人であるということです。まさに時は金なりです。次に「場を清め」とは、清掃という作業ですが、広く捉えるならば、清掃をすることで、気づく心ができる、そして心が整うということです。また職場や学校では、「整理、整頓、清掃、清潔」を徹底していれば、そう大きく崩れることはないともいわれています。さらに、服装、身だしなみも場を清めることとなります。昨年からの生徒の皆さんの制服の着こなしはかなり向上してきました。身だしなみを整えることは、自分が接している相手を敬うことであり、制服を美しく着こなすことは母校を大切にすることにつながります。最後の「礼を正す」ことは、基本的には、挨拶、返事、目礼です。昨年の学校評価でも、挨拶については、課題があり、地域の方々からもたびたびご指摘を受けています。かつて大手進学塾のキャッチコピーに挨拶も学力というのがありました。

挨拶という漢字には、心を開いて相手にせまるという意味が込められているといわれています。是非、形式的な挨拶ではなく、相手の目を見て心に伝わる挨拶を心がけたいものです。そして卒業時には、社会に通用する品格と所作を身に付けた人が一人でも多く巣立っていくことを願っています。

